

三二 會所銀貸渡額減少之儀觸

會所裁許御貸銀之儀、他國當五百目、地廻三百目充致借用候得共、御勝手御難澁御要脚必至と差支、可貸渡會所銀一向無之、御かり銀を以可貸渡外無之候。依之享保十年被仰渡之例に立歸、他國・地廻り當共別紙之通、當分減少御貸渡之筈に候條、被得其意、組・支配之人々にも申渡、尤同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候。以上。

(寶曆六年)
八月廿七日

奥村主水

會所銀知行高當之覺

一、他國詰人等百石に付三百目充之事。

但、利足は唯今迄之通、百目に付五朱宛之圖を以、元銀之分は借用之翌年より五ヶ年之年賦を以返上、利足は毎歲年切に差上可申候。右年限より指詰返上之儀は、尤勝手次第之事。

一、御領國地廻り之分、百石に付二百目充之事。

但、返上之趣等右同事。

一、新番以下御扶持方・御切米被下候人々は、他國詰人等百五十目充、地廻之分百目充。返上之趣等前段同事。

一、知行當り借用之翌年、他國・地廻往來之節證文相改候儀、可爲前々之通候。且借用之内一兩年分返上之上、他國・地廻往來之節證文改、知行當之高に引足借用之儀、是又勝手次第之事。

一、人により知行當りより内借用之人々も、右御定之通五ヶ年に返上之事。

一、他國急使、又は御用之品により無據趣有之、右當りにて不足仕儀に候ば、頭・支配人精誠吟味之上、年寄中に相違、格別之趣承届、其段年寄中より會所奉行に申渡、百石五百目、御切米取は三百目當り迄は貸渡可申事。

一、只今迄百石五百目充知行當り借用之人々は、證文相改候迄は年限之通返上仕、他國往還等にて證文相改候節は、右知行當三百目充之外は過借に相成候事に候條、此分は致返上、證文相改可申候。御切米・御扶持方被下候人々も、右同前之事。

但、過借之分は、其時々相願返上延引之儀は格別之事。
右之通當分被仰付候旨、被仰出候條可被得其意事。

(寶曆六年)
丙子八月

三二 他國借銀相對差引之儀觸

御家中之人々困窮に付、銀札遣被仰付御救被成候に付、他國借金銀・買懸銀等も爲書出しらへ申管に候處、銀札遣御差止候に付、最前之通自分相對を以致差引候様、江戸表町人共ね可申聞旨、彼地會所奉行に申渡候。依之京・大阪等借金銀之分も、右同事に候條、其心得有之様可被申聞候。

右書出置候趣、從御上御取捌有之儀与相心得罷在候所、自分捌に相成候ては迷惑可仕儀に候得共、御勝手必至と御潰に付、被成方も無之候。其分に被指置候ては、甚御爲に相障候に付、右之通にて御爲之儀に候間、此所致了簡、銀主等より及催促候は、何分にも宜申聞、取捌候様可被申聞事。

(寶曆六年)
十一月晦日

三三 勝手取續之儀に付觸

御家中之人々儉約之儀、兼て被仰渡置候通に付、今更何廉申談候には不及儀に候得共、今般之儀は前々之振とは甚相違之事に候。御家中之人々勝手難澁に付而、度々御救被仰付結構成儀、此上可申上筋は無之事に候。然所御上御勝手累年御難澁之上、打續御領國作毛不熟、去々年は莫大之御損毛、其上數年不時御物入有之、銀鈔遣被仰付候に付ても過分之御費有之。最早御勝手御潰れ被成大切成儀に付、面々申談、知行米之内差上候様成御時節に候得共、自分勝手之儀は、延享三年附札を以相渡候書立之趣急度相守、内外共嚴重遂儉約、江戸詰等并御使等に旅行之粧ひ等も、可成程致省略、勤仕問不申様相心得候儀專要之事に候。平侍八百石以上、旅行道中鑓二本爲持候得共、當分相減可申候。八百石以下之人々も、右に准省略可仕候。頭分たりとも、減少相成候品は可爲其心得候。且又近年收納拂米猥成儀も有之躰相聞え、不覺悟之至に候。向後右之族於有之は可爲曲事旨、去々年申渡置候通に候條、猶更嚴重に相心得致勸略、勝手取續之儀肝要之事に候。今般拙者共迄御内意之趣も有之に付、右之趣申談候條、被得其意、組・支配之面々に